

ソーシャルワーカーの「役割形成」に関する研究

——精神科病院におけるソーシャルワーク実践に焦点をあてて——

岩 本 操

I 研究の目的と方法

(1) 問題の所在と研究目的

国際ソーシャルワーカー連盟の「ソーシャルワークの定義」(2000)では、ソーシャルワーカーは「人権と社会正義」を基盤に「人間の福祉の増進」を目指した包括的で幅広い活動を行う専門職として定義されている。こうした専門特性は周囲から様々な役割期待を受けることになり、職務の曖昧さが現場のソーシャルワーカーの大きなストレス要因になってきている(清水ら2002)。本来、包括的で流動的な実践を専門特性とするソーシャルワーカーが、その専門特性ゆえに混乱し葛藤を抱えるという自己矛盾は何ゆえ生じているのだろうか?そしてソーシャルワーカーはこの問題現象を、どのように受けとめ対処することによってソーシャルワークを具体化できるのだろうか?この2点が本研究の問いである。

研究目的は、①上記の問題現象が生じている背景・要因を明らかにすること、②ソーシャルワーカーが多様な曖昧な役割期待に対して如何なる解釈や相互作用を行うことで専門的な行為を展開していくのか、その一連の流れをソーシャルワーカーの「役割形成」¹⁾と規定し、そのプロセスを理論化することである。

研究対象は、精神科病院におけるソーシャルワーカー(PSW)の実践とし、PSWが病院組織から要請される「違和感のある仕事」に対応するプロセスに焦点をあてた。その理由は上記の問題現象がより顕著に現れる領域及び場面であるため、「役割形成」の過程が可視化でき、またその有用性が高いと考えたからである。

(2) 研究方法

まず先行研究のレビューを通して、ソーシャルワーカーの自己矛盾が生じている背景・要因について整理し、病院組織の特性や精神科病院の歴史的課題と今日の動向を踏まえて、ソーシャルワーカーの組織における立場性と課題について考察した。続いてグループインタビュー法(安梅2001)及び質問紙法による予備

調査を実施し、精神科病院のPSWが経験する「違和感のある仕事」の実態とその評価と対応の傾向を実証的に把握した。

それらの結果をもとに方法論的限定を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)(木下2003)によるデータの分析から、PSWの「役割形成」プロセスを理論化した。

II ソーシャルワーカーの専門職性をめぐる問題

19世紀後半、英米における社会改良と個別訪問活動という異なる実践を起源とするソーシャルワークは、「個人と社会」という2つの視点を行き来する曖昧さを内包して発展していった(Specht1972 = 1992:84, Germain1980 = 1992:367)。

20世紀に入ると、北米ではFlexnerの示した「属性モデル」に基づく完全専門職への希求が高まり、精神医学や心理学を基盤とした理論化、教育体系や倫理綱領の整備、職能団体の組織化が進められた。しかし1960年代以降の公民権運動の興隆や当事者活動の展開は、専門職のあり方を問い直すものとなり、医学モデルと個人へのアプローチに偏重する形で専門職の権威を追及してきたソーシャルワーカーに対する批判が沸き起こった。そして、ソーシャルワーカーは改めて「個人と社会」双方にアプローチする「生活モデル」(Germain1980)に自らの固有な視点を見出し、近年では、当事者の力や強みに注目し、「当事者との協働」を軸としたエコシステム・ストレングス・アプローチが主流となっている(Johnson & Yanca 2001 = 2004:45 - 47)。

日本では北米で展開した実践理論や属性モデル研究の輸入が進められたが、実践での活用は乏しく、北米のような専門職批判を経験することはなかった。そして、今日では「生活モデル」を基本に据え、「当事者との協働」が強調されている。一方、専門職化の経緯において身分保障が先行した日本では(秋山2007:

23)、資格制度やテストの導入、業務基準の設定など属性モデルの強化も着々と進められている(野口2005:167)。つまり、理論的には専門職の権威を批判し属性モデルと異なる専門職性を追及しながら、他方でソーシャルワーカーの社会的承認と地位向上のために属性モデルを追及するという二重の言説が、その矛盾を問うことなく併存しているのである(三島2007:11)。そして現場のソーシャルワーカーは、その矛盾を無自覚に引き受け、内的葛藤を引き起こしていることが考えられた。

今日の日本におけるソーシャルワーク研究では、クライアントとの関係から生成され規定される専門職のあり方を提唱する実証的研究が、新たな潮流となっている(横山2008, 大谷2010)。しかしそれらの研究はクライアントとの直接的関係に限定され、援助関係を取り巻く組織・機関といった環境システムは、実践の背景に留まったままである。日本のソーシャルワーカーの殆どが機関雇用型であり、実践において組織の影響を強く受けている。そして、ソーシャルワーカーの経験する職務の曖昧さや役割の混乱は、組織との関係が深いことは明らかである。にもかかわらず、これまでのソーシャルワーク研究及び教育では、組織に対する関心が乏しく、組織活動の実際は殆ど論じられることがなかった。このことが理論と実践の乖離をより深刻にしてきたことは十分考えられる。現場のソーシャルワーカーは組織との関係に日々困難さを抱えながら、それに対処する実践技能を持ちえず、自らの立場をより不安定にしていることが示唆された。

Ⅲ 病院組織とソーシャルワーカー

(1) 病院組織の特性

病院組織は、多様な専門職で構成されているため、多様な目標が存在し、多面的な権限構造と命令システムをもち、現場で様々なことが決定されていく。また、制度や環境の規制を強く受け、利用者との相互作用によって仕事の内容も手段も変わってくるという特性を持つ(中島2007:175-181)。つまり病院とは曖昧さと不確実性をもち、絶えず環境の変化にさらされている状況対応型の組織なのである。ソーシャルワーカーは自身の立場の曖昧さを語るが、それはソーシャルワーカーに固有の問題という以前に、病院組織の特性を理解した状況認識が必要である。

一方、ソーシャルワーカーゆえに病院組織の曖昧さや矛盾と対峙しやすい側面もある。医療機関である病

院において福祉は二次的目的であり、ソーシャルワーカーは他の専門職より階層的に低い立場に置かれ、多面的な権力構造が交差する圧力を受けやすい。また諸制度や病院外の事情に詳しいため、病院が環境の変化にさらされる際、病院内の抵抗と対峙しやすいのである。

(2) 精神科病院における PSW の立場性

精神科病院は上記の組織特性に加え、歴史的に多くの課題を抱えてきた。精神科独自の医療政策のもとで、精神科病院は少ないスタッフ配置で集団管理を行う隔離収容の場と化していった。1950年代以降、民間精神科病院の設立が急増する中で、PSWの雇用も進んだが、彼らは少ないマンパワーを補う要員としても期待され、実に雑多な仕事を担う現実があった(佐々木2010:12)。また、PSWは患者の権利を阻害する治療構造に対抗し、権利擁護や退院支援を行う立場を明確にしてきたが、病院組織の閉鎖性や階層的勢力関係の中で、厳しい立場にも置かれてもいた(大瀧2004:284)。

今日の精神医療改革の流れは、効率的な医療の提供を目的に診療報酬誘導型の病床機能分化と入退院の加速化を推進し、それらを促進すべく地域移行や地域連携が強調されるようになってきた。これまでPSWが実践上重視してきた「退院支援」や「地域連携」という言葉が、ソーシャルワークとは全く異なる病院経営上の文脈に置き換えられ、そのままPSWに期待する動きが見受けられている(岩本2005, 2009)。つまり、体裁上は「ソーシャルワーク的」として組織から要請される仕事を、ソーシャルワークの文脈で読み替えていかなければ、「何となく」医療モデルや経済効率に組み込まれてしまうリスクにさらされているのである。

精神科病院のPSWは歴史的に多くのジレンマを抱えてきた。それは病院組織から要請される様々な「違和感のある仕事」と対峙してきた経緯であり、今なお新たな課題に直面している。しかし、PSWの経験する「違和感のある仕事」は病院組織の問題や矛盾を反映したものであり、それは同時に組織の改善を志向する資源でもある。この違和感の中身を検証し、PSWのアプローチを明確にしていくことが、クライアントの環境に働きかけるソーシャルワークの機能につながると考えられた。

IV PSW が経験する「違和感のある仕事」の実態

精神科病院のPSWが経験する「違和感のある仕事」の実態を把握するため、2つの予備調査を実施した。

(1) グループインタビュー調査

経験10年以上の《管理職グループ》と経験3～5年の《若手グループ》の2つのグループインタビューを実施し、グループごとの内容分析に加えて2つのグループの複合分析を行った。

結果として、PSWが経験する「違和感のある仕事」の内容は、「病院経営」「運営・管理」「ベッドコントロール」「面倒事の請負」「間に入る・隙間を埋める」「他部署・他職種の業務の請負」「担当不明の仕事」の7つが抽出された。またそれらの仕事に要請される背景・要因として「ソーシャルワークの特性」「PSWの力量」「他職種の都合・誤解」「慣例」「経済面」「組織の問題」の6つが抽出された。

2つのグループとも「違和感のある仕事」の内容によって肯定的評価と否定的評価とに分かれていたが、《若手グループ》が「違和感のある仕事」が要請される状況自体を肯定的に捉える傾向にある一方、《管理職グループ》は「違和感のある仕事」が発生する状況自体は問題視しており、その状況を改善するためにPSWが関与することに肯定的評価をしていた。そして《管理職グループ》はPSWの視点から仕事内容を修正したり、状況改善に向けて周囲に働きかける傾向が見受けられた。

(2) アンケート調査

全国の精神科病院に勤務するPSWを対象に質問紙によるアンケート調査を実施した。質問項目は①PSWの属性、②所属機関の属性、③専門性に関する意見、④「違和感のある仕事(38項目)」²⁾の《実施度》《組織からの期待度》《PSWの評価》とし、結果の集計と項目間の関連を分析した(n=655)。

結果として、PSWの業務範囲を「限定すべきである」と考えるものは極僅かである一方、「限定すべきでない」とも言い切れず、判断保留の立場が大半を占めていた(60.6%)。また「違和感のある仕事」として挙げた38項目の業務について、《実施度》及び《組織からの期待度》が高い業務は、《PSWの評価》も高くなる傾向が示された。さらに、38項目中34の業務について「PSWが行っても良い」と回答するものが最も

多い割合を示す一方、「PSWが行うことに意味がある」と回答するものは全体的に僅かな割合であった。

この結果から、PSWは「違和感のある仕事」を否定はしないが、PSWの仕事として意味づけすることもなく、現状に「同化」あるいは「態度保留のまま許容」している傾向が示された。一方、経験年数との関係を見ると、経験年数が高いほど業務範囲を「限定すべきでない」と回答するものが有意(p=0.002)に高くなるものの、「違和感のある仕事」に対する《PSWの評価》では、経験年数が高いほど有意に肯定的評価と否定的評価に偏る傾向が示された。

以上の予備調査の結果より、経験年数の高いPSWは自らが行う業務の範囲を柔軟且つ開放的に捉えている一方、具体的な個々の業務に対して一定の評価基準をもち、PSWとして組織関係者に働きかける傾向が示された。よって、このPSWの実践プロセスを明らかにすることが、ソーシャルワーカーの「役割形成」の理論化につながると考えられた。

V PSWの「役割形成」プロセス

以上の結果を踏まえ、M-GTAによるデータの分析から、精神科病院のPSWの「役割形成」プロセスの理論化を行った。

(1) 分析の方法と手順

①分析テーマと分析焦点者

M-GTAでは「分析テーマ」と「分析焦点者」を設定して方法的限定を行い、この2点からデータを分析する。これにより、どのような立場にある人の、どのような状況における、どのような相互作用のプロセスを明らかにするのかを明確に定め、人間の行動と予測に関する説明に説得力をつけるとともに、その範囲において実践での活用を促進するのである(木下2003:136)。

本研究では分析テーマを「精神科病院のPSWが組織から要請される違和感のある仕事をソーシャルワーカーとして『役割形成』していくプロセス」とし、分析焦点者を「精神科病院に勤務するソーシャルワーク経験10年以上の精神保健福祉士」とした。

②調査協力者とデータの収集法

調査協力者は、分析焦点者の要件を満たし、且つ病院組織の役割期待とソーシャルワークの専門性との調整を図り能動的なソーシャルワークを展開する一定の

力量を有していると認められる12名に依頼した。

調査協力者に対し、以下のインタビューガイドを提示し、個別の半構造化面接によるデータの収集を行った。調査協力者の許可を得てインタビュー内容を録音し、それを逐語記録に文字化したものを分析対象とした。

インタビューガイド

- ・ 普段、仕事をしている時、自分の行動や判断の基準としているもの（こと）は何か。
- ・ これまで病院組織から期待・要請された仕事の中で、特に違和感を覚えたものをいくつか挙げて下さい。
- ・ それらの仕事を要請された時、どのように評価・解釈し、どのように対処しようとしたか。そして実際にどのように行動したのか（なるべく具体的に）。
- ・ それらの仕事の遂行パターンについて、自分ではどのように評価しているのか。

③倫理的配慮

インタビューに際して、調査協力者のプライバシーの遵守、データの管理方法、調査結果の公表時の配慮、公表内容の事前確認要領、について口頭及び文書にて説明し、同意を得て実施した。

④分析の手順

収集したデータの中で、分析テーマに照らしてもつ

とも注目した箇所を取りあげ、そのデータの意味を様々な角度から読み取り、一定の解釈が定まったところで「定義」と「概念名」を設定し、分析ワークシートに記入した。そして同様の解釈ができると考えられる他のデータを類似例として検討を重ね、1つの概念を生成していった。同様の手順で他の概念の生成を重ねながら、並行して概念間の関連を検討して複数の概念の関係からなるカテゴリーを生成し、カテゴリー相互の関係から全体像を描くというプロセスを踏んでいった。なお筆者は、この分析過程で4回の分析スーパーバージョン³⁾を受けた。

(2) 結果

①結果図

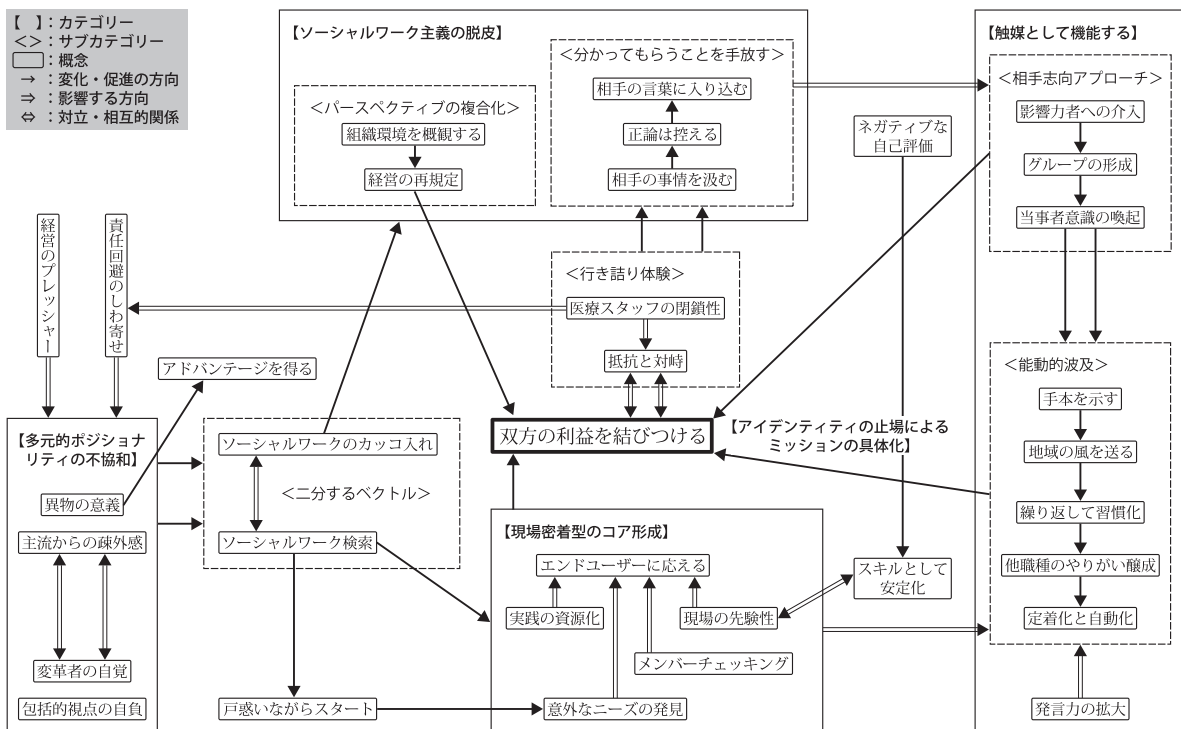
【図】は、分析結果の全体を示したものである。最終的に採用された概念は34であり、概念間の関連性を検討して5つのカテゴリーと6つのサブカテゴリーが生成された。

②結果のストーリーライン⁴⁾

<要約>

PSWの「役割形成」プロセスとは、利用者と組織【双方の利益を結びつける】営みであり、それを促進するPSWの実践基盤は【アイデンティティの止揚による

【図】 M-GTA 結果図：精神科病院のPSWが組織から要請される違和感のある仕事をソーシャルワーカーとして「役割形成」していくプロセス



ミッションの具体化】である。

<ストーリーライン>

PSW は、病院組織から【経営のプレッシャー】〔責任回避のしわ寄せ〕などの違和感を覚える仕事を要請されることが少なくない。ここで PSW は「簡単に拒否できない」という現実問題に加えて、〔変革者の自覚〕と〔包括的視点の自負〕が働き、それらの仕事を放置できない自分にも直面するという【多元的ポジショナリティの不協和】を経験する。

PSW が【多元的ポジショナリティの不協和】から脱する上で注目すべき動きは、徹底した〔ソーシャルワーク探索〕と〔ソーシャルワークのカッコ入れ〕という<二分するベクトル>を同時に起動させ、【現場密着型のコア形成】と【ソーシャルワーク主義の脱皮】を相互に関連づけながら展開している点である。

【現場密着型のコア形成】は、違和感のある仕事を「ソーシャルワーカーだからできること」に転換しようと〔ソーシャルワーク探索〕を行う過程で必然的に浮かび上がってくるものである。PSW が今動こうとしている対象は「現前する具体的な利用者」ではないが、〔実践の資源化〕によって潜在的な利用者を想定し、〔エンドユーザーに伝える〕ことを自身の行動の支柱に置く。【現場密着型のコア形成】は PSW が「ソーシャルワーカーであること」にこだわりきる中で生み出された必然的動機づけと言えるが、一方で PSW はそのこだわりから距離を置くように【ソーシャルワーク主義の脱皮】を図る。

【ソーシャルワーク主義の脱皮】は、ソーシャルワークの「あるべき論」から一旦離れ、〔ソーシャルワークのカッコ入れ〕から展開する動きである。経営者や他職種は PSW とは異なる立場から現象を捉えている。そこにソーシャルワークの視点をいくら強調しても埒が明かない現実直面した PSW は、まず自らを経営者の立場に置き、〔組織環境を概観する〕ことで【経営のプレッシャー】の背景を理解する。そして病院経営が成り立たず医療サービスが機能しない事態は利用者利益を損ない、利用者ニーズに応えられなければ経営も悪化するという観点から【経営の再規定】を行い、【現場密着型のコア形成】に立ち戻りながら、利用者 と病院組織【双方の利益を結びつける】ことを目指して組織関係者に働きかける。

しかし【現場密着型のコア形成】を基軸とした PSW のアプローチは〔医療スタッフの閉鎖性〕による〔抵抗と対峙〕し、<行き詰り体験>に陥ってしまう。この困難な局面を乗り越えていくために、PSW は改

めて【ソーシャルワーク主義の脱皮】を起動させ、自らが【触媒として機能する】ことで状況の改善を迫っていく。具体的には、抵抗を示す関係者に対して<分かってもらうことを手放す>姿勢で臨み、〔正論は控える〕、〔相手の言葉に入り込む〕ことによって、関係者との相互作用領域を確保していく。その上で【影響力者への介入】を図り、関係者が集う場を設定し、関係者が「このままでは自分たちも困る」という【当事者意識の喚起】を促し、状況改善への合意形成をもたらすのである。この段階でようやく【現場密着型のコア形成】を基軸とした PSW の<能動的波及>が関係者に対して効力を発揮し、利用者利益に適った組織機能の活性化が図られ、〔双方の利益を結びつける〕仕組みが組織に定着していくのである。

以上が、違和感のある仕事を要請された状況における PSW の「役割形成」プロセスであるが、この一連の動きを支えているのは【アイデンティティの止場によるミッションの具体化】であり、PSW の「役割形成」に不可欠な内的特性である。PSW は【現場密着型のコア形成】を保持しつつ、それと相反するような【ソーシャルワーク主義の脱皮】を図っているが、両者を統合した実践基盤を形成することでソーシャルワークの根源的使命である「利用者利益」の具体化を目指していたのである。

(3) 考察

①組織活動の実践プロセス

結果で示した PSW の「役割形成」は、病院組織が直面する課題をソーシャルワークの視点から捉えなおし、利用者利益につながる形で組織改革を図るものであった。先述したとおり、ソーシャルワーク研究において組織活動は周辺化されてきた経緯があるが、北米では「生活モデル」の視点からその重要性が提唱されてきている (Patti&Resnick 1972, Brager&Holloway1978, Specht 1988 = 1991, Germain&Gitterman199 = 2008, Johnson&Yanca 2001 = 2004)。【表】は Germain らの示す「組織介入」の実践理論と本研究の分析結果から得られた概念との比較を行ったものである。

両者には多くの共通項が見い出せるが、本研究結果が示した PSW の実践は、Germain らの理論を活用したわけではなく、現場での試行錯誤の末に身につけてきたものである。それが「生活モデル」に基づく実践理論によって支持され、非常に理に適った動きであったことの意義は大きい。この PSW の実践を日常的な

【表】「組織介入」実践理論と研究結果の比較

「組織介入」実践理論 (Germainら)	本研究の分析結果
<ul style="list-style-type: none"> 組織アセスメント 	<ul style="list-style-type: none"> 組織環境を概観する 経営の再規定 医療スタッフの閉鎖性
<ul style="list-style-type: none"> 組織内に受け入れやすい雰囲気を作成（非公式の情報集め、根回し） 適切な人物を据える 人間関係網に積極的参加 組織関係者に問題を気づかせる 	<ul style="list-style-type: none"> 相手の事情を汲む 影響力者への介入 グループの形成 当事者意識の喚起
<ul style="list-style-type: none"> 相手の価値観を受け入れられる表現を使う、相手の主たる関心事に言及する （対立的な場面において）倫理的義務から生じる対立ではなく、組織に対する忠誠心から生じているという立場を示す 	<ul style="list-style-type: none"> 正論は控える 相手の言葉に入り込む 双方の利益を結びつける
<ul style="list-style-type: none"> 関係者の変化に対する不安に共感し、動機づけを行い、必要な支援を推進する 関係者の評価されたいというニーズに配慮し、変化の定着を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 手本を示す 地域の風を送る 繰り返して習慣化 他職種のやりがい醸成 定着と自動化

試行錯誤の結果に留めず、日本における組織活動の実践モデルとして位置づけていくことが重要である。こうした理論的発展が、利用者の環境に働きかけるソーシャルワーク機能の向上につながると考えられた。

②アイデンティティ論の再考

研究結果では【双方の利益を結びつける】プロセスを構成する主要な特性を相互に関連付けて理論化した。そのうち最も重要な特性が【アイデンティティの止揚によるミッションの具体化】である。ソーシャルワークにおいて、従来からアイデンティティの確立が強調されているが、その過度な要求は矮小化した「排他独自性」に陥る危険性もある。現実的に、様々な価値観を有する人々との相互作用は1つのアイデンティティへの帰属のみでは乗り切れない。結果で示したとおり、PSWが既存のアイデンティティに忠実に留まっていれば、組織関係者との相互作用は展開せず、利用者利益を目指した組織改革は困難であった。

ソーシャルワーカーがクライアントの環境に働きかける機能を果たそうとするならば、異なる価値観やソーシャルワークと対抗する人々の主張を取り込み、既存のアイデンティティとの緊張関係を自らの内に引き受けることで、立場の異なる人々との相互作用領域を切り開いていくことが求められる。【アイデンティティの止揚によるミッションの具体化】は、異質なものを取り込みつつ昇華し深化していくアイデンティティ形成のあり様であり、まさに包括的視点を基本とするソーシャルワーカーの独自性がここに表れてくる。結果が示したPSWの実践プロセスは、ソーシャ

ルワークにおける従来のアイデンティティ論の再考を促し、新たなアイデンティティのあり様を示唆するものであったと考えられた。

VI 研究の意義と課題

(1) 研究結果の意義

本研究の意義として、以下の3点が考えられた。一つ目の意義は、ソーシャルワーカーの「役割形成」として、組織と利用者【双方の利益を結びつける】プロセスを提示した点である。【双方の利益を結びつける】こと自体は「生活モデル」に基づくソーシャルワークに他ならない。しかし、「生活モデル」の認識論は広く受け入れられているものの、それを実践に反映させる方法展開は未だ開発されておらず、既存の技法に依存しているという指摘がある（中村 2005：131）。既存の技法への依存とは、長い間主流であった個人に対するアプローチへの依存である。つまり環境に対する実践レパートリーは依然、手探り状態なのである。本研究において環境へのアプローチの中でも特に理論的に脆弱である対組織アプローチの方法展開を明らかにした点は、ソーシャルワーク実践理論の発展に寄与できると考えている。

二つ目の意義は、ソーシャルワーカーが日常的に経験している「違和感のある仕事」に焦点をあてた先行研究が皆無の中で、この現実問題に対処できる実践モデルを示した点である。本研究は精神科病院におけるPSWの実践に限定化したものであるが、組織に雇用されているソーシャルワーカー共通の課題である「職員としての自己」と「専門職としての自己」との二元論を克服し、「職務の曖昧さ」に対する主体的解決行動を示し得たと考えている。そして、研究結果は「生活モデル」に基づくソーシャルワークに広く応用できると考えている。ソーシャルワーカーはクライアントと環境との間で生じる不具合に働きかけるが、それはクライアントの福祉を阻害し、ソーシャルワークの価値観と相容れない人々や集団との相互作用を展開していく行為でもある。こうした葛藤状態からソーシャルワークを切り開く「役割形成」のあり様は、ソーシャルワークが有する本質的課題に対応できるのではないかと考えている。

三つ目の意義は、従来のソーシャルワーク研究から周辺化され除外されてきた現象に着目し、そこから一定の理論化を提示した点である。結果は「生活モデル」を実践に反映させる技法の提示となり、従来のアイデ

ンティティ論を再考する機会を提供した。ソーシャルワークの主流から外れた実践は、語る言葉も語る機会も乏しい。こうして埋もれていく実践の中には、実はソーシャルワークの中核を刺激し、新たな理論の発展につながる可能性を持っている。ソーシャルワーク研究が「実践の科学化」を重視するのであれば、実際にソーシャルワーカーが行っていることを周辺化せず、その意味を問うことが必要である。それが複雑な現場に堪える実践モデルの発見となり、実践や教育につなげていけると考えている。

(2) 研究の限界と課題

研究の限界と課題として以下の点があげられる。まず、研究結果を「マクロ-メゾ-ミクロ」の包括的枠組から考察するに至らなかった点である。本研究はソーシャルワーカーの組織活動に限定化したものであるが、「生活モデル」の視点に立つソーシャルワーク研究において、得られた結果を包括的視点から検討する必要性を認識している。これと関連して、研究結果を「ソーシャルアドミニストレーション論」や「福祉経営」の観点から比較検討することも必要である。また、本研究では一定の経験と力量を有する PSW の実践に焦点をあてているが、どの段階であればこの実践モデルを活用できるのかを明らかにしていない。さらに、提示した実践モデルはソーシャルワーカーの違和感から出発しているが、違和感を感知し保ち続けるメカニズムについては言及できていない。いずれも研究結果の実践的活用において重要な点であり、新たな研究課題として検討していきたい。

謝辞

本論は 2011 年度学位請求論文の一部としてまとめたものである。論文執筆にあたり、指導教授として長年ご指導頂きました野田文隆先生、副査としてご指導頂きました石川到覚先生、木下康仁先生（立教大学）に感謝申し上げます。また本研究の調査にご協力頂きました多くの PSW の皆様に感謝申し上げます。

註

- 1) シンボリック相互作用論における役割概念を指す。「役割形成」とは、「役割期待」と「役割行為」を区別し、行為者は他者の期待を一定の立場から切り取り、それを選択的に知覚し、認識し、解釈し、他者の期待を修正し再構成して行動することで絶えず役割を作り出していくという相互作用の過程

を意味している。更にここでは、単なる行為者の再解釈、状況規定の変更といった適応技術のみならず、役割期待に沿わない行動や社会・組織の変革を意図した積極的解決行動も一つの役割形成のありようとして捉えている。(Tuner1962, 船津1976, 1995)

- 2) 38 項目の仕事の内容は、先のグループインタビュー調査結果から得られたものである。なお、本調査では「違和感のある仕事」を「PSW が行うべきか迷う仕事」と読替えて質問している。
- 3) 分析スーパービジョンとは、分析者が自分の解釈を言語化し、概念生成及び概念間関連、カテゴリー生成の過程を明確化することである。スーパーバイザーは分析者と一緒にデータを解釈するのではなく、分析者の判断の的確さを確認するよう働きかけるものである。そして判断が不十分であれば、分析者が検討しなおせるよう回路を示す役割をとる(木下 2003: 13)。
- 4) 文中のゴシック体表記は、分析結果から得られたカテゴリー【 】, サブカテゴリー< >, 概念〔 〕を示す。

文献

- 秋山智久(2007)『社会福祉専門職の研究』ミネルヴァ書房
- 安梅勅江(2001)『ヒューマンサービスにおけるグループインタビュー法』医歯薬出版
- Brager G.&Holloway S. (1978) *Changing Human Service Organization : Politics and Practice*, New York Free Press
- 船津衛(1976)『シンボリック相互作用論』恒星社厚生閣
- Germain C.B. (1980) "Social Work Identity, Competence, and Autonomy : The Ecological Perspective" *Social Work in Health Care*, 6 (1), 1 - 10 = 小島容子編訳(1992)『エコロジカルソーシャルワーク カレル・ジャーメイン名論文集』学苑社, 8-100
- Germain C.B. & Gitterman A. (1996) *The Life Model of Social Work Practice : Advances in Theory & Practice 2nd edition* = 田中禮子・小寺全世・橋本由紀子監訳(2008)『ソーシャルワーク実践と生活モデル(下)』ふくろう出版
- 岩本操・松本直樹・高井綾子(2006)「病院における精神保健福祉士の今日的課題 ——インタビュー

- 調査からの検討——」第5回精神保健福祉学会
一般演題
- 岩本操 (2009) 「精神科病床機能分化におけるソーシャルワークの課題——急性期病棟担当ソーシャルワーカーへのインタビュー調査による考察」日本精神保健福祉士協会編『精神保健福祉』78, 148-154
- Johnson L.C.& J.Yanca S.J. (2001) *Social Work Practice : A Generalist Approach 7th edition* =山辺朗子・岩間伸之訳(2004)『ジェネラリスト・ソーシャルワーク』ミネルヴァ書房
- 木下康仁 (2003) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践——質的研究への誘い』弘文堂
- Kemp S.P&Whittaker J.K.&Tracy E.M. (1997) *Person-Environment Practice: The Social Ecology of Interpersonal Helping* =横山穰・北島英治・久保美紀・湯浅典人・石川久美子訳 (2000) 『人—環境のソーシャルワーク実践—対人援助の社会生態学—』川島書店
- 三島亜紀子 (2007) 『社会福祉の<科学>性』勁草書房
- 中島明彦 (2007) 『ヘルスケア・マネジメント—医療福祉経営の基本的視座 [第二版]』同友館
- 中村沙織 (2005) 「生態学 (エコロジカル) アプローチ」久保絃章・副田あけみ編著『ソーシャルワークの実践モデル—心理社会的アプローチからナラティブまで』川島書店, 119-133
- 野口裕二 (2005) 『ナラティブの臨床社会学』勁草書房
- 大瀧敦子 (2004) 「混乱期 (1973 ~ 1977)」社団法人日本精神保健福祉士協会『日本精神保健福祉士協会 40 年史』へるす出版, 37-42
- 大谷京子 (2010) 「精神保健福祉領域におけるソーシャルワーカー——クライアント関係に関する実証研究——『ソーシャルワーカーの自己規定』『対象者観』『関係性』概念を用いて——」『社会福祉学』51 (3), 31-43
- Patti R.&Resnick H. (1972) “Changing the Agency from Within” *Social Work* 17 (7), 48 – 57
- 佐々木敏明 (2010) 「アイデンティティ拡散の危機」柏木昭・佐々木敏明・荒田寛著『ソーシャルワーク協働の思想——“クリネー”から“トポス”へ』へるす出版, 10-29
- 清水隆則・田辺毅彦・西尾祐吾編著 (2002) 『ソーシャルワーカーにおけるバーンアウト——その実態と対応策』中央法規
- Specht H. (1972) “The Deprofessionalization of Social Work” *Social Work*,17 (2) =高沢武司訳 (1978) 「ソーシャル・ワークの脱専門職化」小松源介監訳『現代アメリカの社会福祉論』ミネルヴァ書房, 362-381
- Specht H. (1988) *New Direction for Social Work Practice* =京極高宣・高木邦明監訳 (1991) 『福祉実践の新方向—人間関係と相互作用の実践理論—』中央法規
- Turner,R.H. (1962) Role-Taking : Process versus Conformity, in Rose,A. *Human Behavior and Social Process*, London : Routledge&Kegan Paul, 20-40
- 横山登志子 (2008) 『ソーシャルワーク感覚』弘文堂

岩本 操氏 学位請求論文要旨（課程博士）

ソーシャルワーカーの「役割形成」に関する研究—精神科病院におけるソーシャルワーク実践に焦点をあてて—

I. 問題の所在と研究目的

本研究は、柔軟で包括的な活動を専門特性とするソーシャルワーカー（SW）が、一方で職務の曖昧さに混乱している問題現象に着目した。研究対象を精神科病院のSW（PSW）の実践とし、PSWが組織から要請される「違和感のある仕事」をPSWとして「役割形成」していくプロセスを理論化し、その実践モデルを提示することを研究目的とした。

本研究における「役割形成」とは、行為者が他者の期待を一定の立場から選択的に知覚し、他者の期待を再構成して行動することで絶えず役割を作り出す相互作用の過程を意味している（Tuner1962）。

II. 研究の方法

まず先行研究のレビューを通して、SWの専門職化の経緯を整理し、病院及び精神科病院におけるPSWの立場性について考察した。続いて2つの予備調査から問題現象を実証的に把握し、その結果を踏まえて方法論的限定を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）によるPSWの「役割形成」プロセスを理論化した。

III. 結果と考察

(1) 先行研究レビュー結果

日本におけるSWの役割の混乱は、「属性モデル」に基づく専門職制度の整備と、当事者との関係性に規定される新たな専門職観という二重の言説がその矛盾を問うことなく併存していることが一つの要因であることが示された。また日本のSWの殆どが機関雇用型にもかかわらず、研究・実践におけるSWの組織活動に対する関心は低く、それが理論と実践の乖離を深刻にしている実態が示された。

(2) 予備調査結果

グループインタビュー調査及びアンケート調査（n=655）により、PSWが経験する「違和感のある仕事」の実態とそれの仕事に対するPSWの評価の傾向について明らかにした。結果として、PSWは「違和感のある仕事」が要請される状況に対して許容する傾向が示されたが、経験年数の高いPSWはそれらの仕事に対して一定の評価基準を持ち、組織関係者に働き

かけている傾向が示された。

(3) M-GTA 研究結果

M-GTAにおける分析テーマを「精神科病院のPSWが組織から要請される違和感のある仕事をSWとして役割形成していくプロセス」とし、分析焦点者を「精神科病院に勤務する経験10年以上のPSW」とした。12名の調査協力者に対して半構造化面接によるデータの収集を行った。

分析の結果、34概念、5カテゴリー、6サブカテゴリーが生成され、「精神科病院のPSWが組織から要請される違和感のある仕事をSWとして役割形成していくプロセス」とは、利用者と組織【双方の利益を結びつける】営みであり、それを促進するPSWの実践基盤は【アイデンティティの止揚によるミッションの具体化】であることが示された。それは要請された仕事に対して【多元的ポジショナリティの不協和】を経験したPSWが、【現場密着型のコア形成】を参照軸に定めながら、【ソーシャルワーク主義の脱皮】を介して異なる価値観を有する関係者に働きかけ、自らが【触媒として機能する】ことによって、利用者利益に適った組織の活性化を目指す動きであった。

PSWの動きは、自身のアイデンティティをメタレベルで保持しつつ、それを一旦留保することで、SWの根源的使命である利用者利益を実現させ、アイデンティティの実質を高めるという「アイデンティティの止揚」が機能していたのである。

IV. 結果の意義と課題

研究結果の意義は以下の3点である。①利用者と組織双方の利益を結びつける組織活動のプロセスを明らかにし、「生活モデル」を実践に反映させる技法を提示した点、②上記のプロセスを促進する特性が【アイデンティティの止揚によるミッションの具体化】であることを示し、SWのアイデンティティの再考を促した点、③SW研究において周辺化された実践プロセスを理論化することで、新たな理論的展開に寄与した点、である。今後の課題として、結果を包括的な視点から考察する点、役割形成の素材である「違和感」を保持するメカニズムに関して考察を深める点が挙げられた。